

## SAILING



いずみちゃんが、一身上の都合でミルクホールをやめてから早いものでもう半年になる。その彼女が先日、晴れて夜間の大学を卒業し、専業社会人としての一步を踏み出す記念にと、あでやかな和服の晴れ姿でお母さんと一緒にお店を訪れたのである。にこやかに微笑む美しく成長した娘と母・・・しかし、こころなしかお母さんの表情は少々複雑である。

ミルクホールでの彼女の軌跡は思えば色々な事が本当に多々あった。なにやら最初の小さなミスが大きな失敗を招き、満タンの石油缶を頭からかぶっているのを目撃した事もあった。また、掃除が一番と定評のあった彼女がますます期待に応えようとモップ掃除に夢中になって、マスターが大切にしていた古い掛時計をモップの柄で粉々にしてしまった事もあった。

いつも帰宅時間も気にせず骨身おしませず閉店後まで働いていく彼女が、夜中の2時頃、「行方不明になった」というお母さんの震える声の電話に飛び起きて真夜中の鎌倉を探し回った事もあった。その時彼女は気分良く海の夜風にあたっていたという。そしてそろそろ帰ろうと車を出そうとした時、車を駐車場のコンクリートの車止めにびったりとはめてしまった事に気付いたのだ。どうやってそこを出たのか説明するのはやめておこう。

そんな彼女の目が覚めなくてはない存在だと認めたのは、まずお店の新年の宴会の時だったと思う。いつもどちらかといえば控え目に振る舞っていた彼女の席にもマイクが回ってきた。やんやの声にすっと立ち上がり、身振り手振りも鮮やかに山口百恵など何曲かを披露したのである。しばらくは、あっけにとられていた観客も最後には大喜びで惜しみない拍手を送ったのである。その後の我が水を得たような彼女の活躍ぶりは実に多彩であった。

パーティや宴会での重要な存在であるばかりでなく、自分における数々の失敗を武器に、実話的经验談を次々とミルクホールタイムスに投稿するなど、しだいにミルクホールにおける独自の存在感と重要性を獲得していったのである。

しかし常に2の線を抜け出なかつた彼女をもう一度皆に見直させたのは、彼女がハンサムなボーイフレンドを連れて現われた時だった。このボーイフレンドの出現は彼女のミルクホールにおけるイメージアップにはとても効果的だったように思う。そしてもう一つの出来事は、彼女が大学生活に於いて制作監督した短編映画を披露した事であった。彼女は自分の映画をお店で上映したい事を控え目ながら何度も希望していたのだが、しばらくその機会に恵まれなかった。やっと上映される事になったのは彼女が制作にあたってから一年もが過ぎていた。オークションパーティの会場で上映されたその短編映画の出来映えは皆の期待をはるかに上回っていたといえるだろう。常に2の線を貫きながらも優しくもあり、シビアでもあり、繊細でもある彼女そのものだったのである。

その日いずみちゃんが晴れ姿でお店を訪れたのは、一つの重大な決意を伝える為だったのだと思う。某エステティックサロンに就職の決まっていたはずの彼女は、突如予定を変更。「女慣になる。」決心をしたのだ。当然長く険しい道になるだろう。お母さんの心配も想像しようというものである。家族で話し合い、5年間という期間を彼女は擱んだ。その日私達はケーキを頂きながら彼女の強い希望と熱意を聞いた。

「ガンバレ、いずみちゃん！」



Milk Hall Times 20th

## SUMMER TIME

或る晴れた日に、私は季節はずれの大掃除の仕上げにきれいに塗り上げられた天井吊の冷房機の点検の為、スイッチを入れてみた。椅子の上に爪先立ちして冷房機の中を覗き込んでいた私の顔の上に、ブーンといううなり音をあげて気だるくゆっくりと回り始めたモーターの音と共に、ほこりをいっぱい含んだ去年の夏の風が吹き込んで来た。

数秒が数時間にも感じられるような時の流れ。うだるような暑さの中、ゆっくりと通り過ぎて行く町並み。すれ違う自転車の少年。その少年の顔にずっと以前に或る島で出会った少年の顔が重なっていた。

私はいつかのように、島の海からの道を歩いていた。町まで続く白い一本道10メートルを越すかと思われのようなヤシの木の並木道。道に沿って続く白く高い塀。私はゆっくりと歩いている。時々裏口らしき所に銃を持った兵隊がいる。横目で視線を送る。少し先には大きな広場が見える。何百人の人々が太陽が頭のとっぺんにくるといふのに、闘鶏に異様な熱気で興じているのだ。さらに歩いて行くともう一つの海岸に出る。気が付くと周りの木々の下にはそれぞれ何人かの島の子供達が隠れてこちらを見ている。その中の一人に手を振ってみせるとあちらこちらから何人もの子供達が集って現われた。

いつのまにか私は、黒光りした子供達にとり囲まれるような格好になった。最後まで照れて、怒った様に少し離れた木に斜めになってもたれかかっていた少年にもう一度手を振った。彼は少し顔を上げて真っ黒い顔のなかの白い歯で答えた。私は海から見える教会の方へと歩き始めた。

何人かの子供達が着いてくる。白い塗り壁の教会の中は冷んやりと涼しい。よく見ると壁には一面に魚の形をした風穴が縦り抜かれていた。魚の形を目で探りながら視線を走らせると、さっきの少年はやはり少し離れたそこにいた。私は彼に向かってもう一度手を差し伸べた。

強い海からの風が吹き、潮と砂を一杯に飲んで舞い上がっていた。



## Milk Hall NEWS

ミルクホールでは、5月27日金曜日オークションパーティを開催致します。様々なアンティークを御紹介致します。興味の有る方は、お友達とお問い合わせの上是非気軽に御参加下さい。詳しくは別紙INFORMATIONにて掲載致しております。

従業員・アルバイト募集！  
長期間仕事の出来る方、料理が好きな方、骨董に興味のある方を希望しています。20才以上、性別は問いません。熱意の有る方大歓迎です。カウンター老松まで

WANTED.....

編集部より

ミルクホールタイムス御愛読有り難う御座います。

編集部では事件記者を募集しています。不思議な事件、愉快な話題等お知らせ下さい。

定期購読者を募集しています。御希望の方は60円切手12枚又は、720円をそえてお申込み下さい。毎月郵送させていただきます。又、御意見、御希望等を御寄せ下さい。

